



ICT 海外ボランティア会会報

No. 63

2016年3月4日(金)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : info@ictov.jp

目次

◆巻頭言

「電電公社・NTT 民営化直後の海外技術協力」の発行を祝して

NTT コミュニケーションズ株式会社 取締役相談役 有馬 彰氏

◆特別寄稿

スタート時は強権発動

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆技術協力体験寄稿

私の SV 経験から

新東京医科大学ポンペイ校教授 岡田 一秀氏

◆読者便り

新春、読者ひとり言

NTT・OB 大内 忠康氏

◆第 21 回 海外情報談話会 開催模様

事務局

◆ 第 22 回 海外情報談話会 開催のお知らせ

事務局

巻頭言

「電電公社・NTT 民営化直後の海外技術協力」の発行を祝して

NTT コミュニケーションズ株式会社
取締役相談役 有馬 彰

(当 ICT 海外ボランティア会は、NTT ご支援のもと、冊子「電電公社および NTT 民営化直後の海外技術協力活動」を編集いたし、本冊子にお二人より巻頭言をいただきました。著者のご了承をいただき、これらを今号および次号会報に掲載いたします。…編集担当)



「電電公社および民営化直後の海外技術協力活動」の発行、誠におめでとうございます。また、発行に係られた関係者の皆様のご尽力に心より敬意を表させていただきます。

私自身はこの分野の経験はございませんが、現在の NTT グループ全体の発展がグローバルビジネスの発展によって支えられていることを考えますと、民営化に至るまでの海外技術協力活動に携わられた皆様の地道なご功績により、現在の NTT があることを改めて感じております。NTT コミュニケーションズの例で申し上げますと、1999年の発足以来、IP 化による電話・専用線等の縮退やモバイルへ

の通信ニーズのシフトにより、国内の事業収入は継続的に減少しておりますが、一方発足当時はほぼゼロであった海外の事業収入は成長を続け、現在では全収入の4分の1が海外事業の収入となっております。また、国内と海外を合わせた収入も発足以来減収を続けておりましたが、2013年度以降は海外事業の成長により全体の事業収入も拡大を続けることが出来るようになりました。また、この間に海外企業の買収を積極的に進めたこともあり、海外で働く外国人社員が1万人を超えまして、正社員だけで言いますと全社員の半分が外国人、国内の非正規社員1万人を加えても全社員の3分の1が外国人という会社になりました。また、数年前から、事業のグローバル化に対応するために、NTT コミュニケーションズ本体の新入社員の約2割は外国人を採用したり、NTT コミュニケーションズのグループ社長会も買収した海外会社の10数人の外国人社長が参加しますので英語で開催したり、現実の事業運営上も買収した海外の会社とのグローバル一体的なサービス開発やサービス運営が主になってきましたので、日比谷の本社ビルでも海外の会社の社員と英語でTV会議や電話会議で仕事を進めることが一般的になってきています。

もう一つの事業構造の変化の例を申し上げますと、1999年の NTT コミュニケーションズの事業収入の9割以上は電話・専用線・データ回線等のネットワーク収入でしたが、

現在ではネットワーク収入は全体の6割未満になってしまい、クラウド・データセンター・アプリケーション・システムインテグレーション・セキュリティ等の非ネットワーク収入が全体の4割を超えるまでになっておりまして、ネットワーク収入の割合が5割未満になるのも時間の問題と言うような状況になっています。また、クラウド等の新たな事業分野での技術・サービスの展開は、残念ながら海外が先行しており、かつ非常に速いスピードで変化をしまして、この動きに遅れないようにする為には、先程申し上げましたように買収した海外の会社とグローバル一体的な事業運営をすることが不可欠になっています。これを進めるために、NTT コミュニケーションズでは2011年に「グローバルクラウドビジョン」を発表しまして、国内中心の通信事業者からグローバルでトータルなICT事業者に変革する取り組みを続けているところです。

この変革を実現することは生やさしいことではありませんし、また自らが常に変化し続けることが必要だと思っておりますが、電電公社時代から海外活動に従事された先輩の皆さんのご功績に応えるためにも、事業の永続的な発展を実現するためにも、一層の努力を傾注していきますこととお誓いして、「電電公社および民営化直後の海外技術協力活動」発行にあたってのお祝いの言葉に代えさせていただきます。

特別寄稿

スタート時は強権発動

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

新しい方向へ全体を転換させるスタート時には、本当に理解している幹部が、やみくもに命令して、それ以外には絶対やらせないぞ、ということから始めて、結果を見せて、納得させるやり方でやらないと間に合わない。

習字を習う時でも、大人に手を握られて、いやおうなしに大人の力で動かされて、初めて手の動かし方のタイミングなり、押さえつけ、引っぱりの感じが出てくるものである。

一回成功の経験を持つこと、自信が出てきてあとは、相乗効果ですべてのものが出てくるようになる。

【石井 孝氏のひと言】

「電話屋の大事な商売道具である電子交換機がダウンして、自分たちで直せずメーカーを飛んで行かせる。おかしいのではないか。交換機のソフトウエアをメーカーに丸投げしているからだ。どうだ、自分たちで直せるように、ソフトウエアを内製してみないか」

民営化を明日にひかえた1985年の3月末、電々公社（当時）の真藤総裁は呼びつけるや否や、まくし立てた。総裁と地方現場の責任者が差して話すなどまったく考えられないお役所さながらの公社で、これはまさに強権発動であった。

その後間もなく分ったのであるが、真藤さんの真意は「電々はこのままでは、10年先電話で飯が食えなくなる。今のうちに次ぎの飯の種を仕込んでおかなければならない。これから社会のあらゆるところにコンピューターが浸透し、社会活動そのものが“コンピュ

ーターオリエンテッド”になる。今やるべきことソフトウェアで、特にマイクロプロセッサに使うソフトだ」と確信していたようである。当時未だマイクロソフトもインテルもまったく姿形の見えない時である。

交換機のソフトウェアをやっておけば、今で言うマイクロチップへの組み込みソフトの技術がマスターできるという読みがあったようだ。

真藤さんの経営上の卓越した先見性と、技術屋としての勘の鋭さが分るにつれ、真に頭が下がる強権発動であった。

真藤さんはやり方についても指示された。「難しく考えるな。今あるソフトを“習って、覚えて、真似して、捨てる”。“しっかりやれ”とか“死ぬ気で頑張れ”などと言った精神論ではない。

技術協力体験寄稿

私の SV 経験から

新東京医科大学ポンペイ校教授
岡田 一秀

私は、2013年10月3日から2015年10月1日までの間、オセアニアの1画、ミクロネシアという東西に長い、実際に、時間帯が2つ存在する島国に2年間派遣されておりました元SVです。

私の場合、比較的にぎやかな街コロニアにおりまして、そこに、総合大学 College of Micronesia の工学部があるのですが、その通信工学科で、通信工学・電子工学、そして、後半は、情報工学も教えていました。



SVの経験は、コンピュータ会社と自動車会社に勤めていました自分には、新鮮でした。

その中で、通信工学を10年ほどやったのは、コンピュータ会社に在籍時の四半世紀ほど前でしょうか。日本にSS(Spread Spectrum)が2.4GHz帯で、解放されたのが、1992年で、パルス変調系が、当時としては、進化した変調方式とも言われたものですが、今は、ミクロネシアでの教育でも、周波数ホッピングに見られるような、故意に帯域を広くして、対ノイズ性や秘匿性をよくしたりするSSを紹介したり、被変調波のデジタルパターンに応じて、位相シフトする象限を決め、アナログで送り出すような、QPSK・QAM等を教えるようになって、ここまで、通信は、進化してしまったのか、驚くことも然りで、私自身も勉強することが多かったです。

また、電子回路における、回路設計のし方は、0か1の世界しか扱わないデジタル回路においても、中途半端な電位も扱うアナログ回路においても、時間が経とうが不変であり、シミュレータによる、入力と出力信号の関係をビジュアルに訴える形で見せる訳ですが、



C言語によるプログラム設計の部分、回路ボードの作成の面でも、最近、ハードからの機能代替も含め、多く入ってきているとも、そのプログラミングのし方とも併せ、教えました。

また、工学部の場合は、どこでも、試作機作りも大事なのですが、私自身も、上腕ロボットや小型のソーラーカー、超音波ソナー、スピーカーに付くアンプをハードで、

またスピーナや変声機をソフトで、作って、学生に紹介しました。

英語やスペイン語等、メジャーな言葉だけではなく、地元の言葉も覚えると、コミュニケーションは、寧ろ、スムーズに進むことも知りました。

また、同学の他の学部は、短期大学コースが多かったですが、通信工学科に関しては、2年コース・3年コース・5年コースとあり、学生の年層は、社会人学生もいたこともあり、17～33歳くらいに及んでいました。

ミクロネシア自体の我々がいた、東側時間帯の地域を紹介しますと、常夏の温暖な気候で、最高気温が33℃程度、夜は涼しくなって来ます。

比較的過ごしやすいのが12～2月でして、にわか雨・長雨含めて、雨が多く、サンゴ礁に囲まれた、海洋性熱帯気候の国ということが言えると思います。

コロニア周辺では、スポーツジムもサウナも、プールも、ミクロネシア固有の料理（マグロの刺身・バナナ入り料理・ココナッツジュースなど）に加えて、日・中・比・米等各国の料理店もあります。

金曜に、仕事を終え、多く熱帯魚の泳ぐ海岸べたを散策し、その後、プールでの1泳ぎを経て、ジムへ。後は、ルーフ・オープンの南国料理か中華で締める。これが、非常に楽しみでした。

日本の比較的新しい感じのクルマも多く入っており、今は、現地のTele-Com.と呼ばれる電話会社では、以前あった携帯電話が、殆ど、スマホに入れ替わっており、IPhon-6あたりも、13万円程（貨幣は、米ドルなのですが）で売っています。

文化としては、キリスト教が主宗教であり、カトリックとプロテスタントが半々ずついるにも関わらず、彼らは争うことなく、他国民に対しても含めて、仲良くやっており、概して皆、きれい好きで、親切です。

任期を終え、今は、米国設立の医科大学の Full Professor になりました。

2008年に学位を取った研究室の専門であった、医工学・医用数学（微積・確率/統計論を含む）を教える教職のポストが、当地でSV離任前後にそこで空き、レジューメを出した後、模擬授業試験され、合格できたのが幸いでした。結果として、早期発見や治療に根差ざして、今までやって来た・通信工学・音響工学・画像工学・ロボティクスと、縦横無尽に使わなければならないものの、業務としては、“工”から“医”に45°ほど、舵を切った感じですか。

日々、若くして医師になろうと決意した、学生たちに「全世界を見ると、年間、4,000万人、病気で、死んでいるのだから、この事実は、民族・主義・信条を超えて、脅威である。

医療に関する日常のルーチンワークもしっかりして、ER（緊急医療）に耐え、早期発見と治療の面から、医工学の分野で、多くの患者・患者予備軍の人たちの救命への発明もしっかりするように。」と言っています。相談・Q&A等のオフィスアワーも、いつ、教授室をノックしてくれてもよし、としています。

概して、彼らが、道を早くにして決めていて、もはや迷いが無く、勉強の必要性をより自覚しているせいか、医学部の方が、工学部よりも、質問も多く、議論も活発です。

スタッフも秘書も優秀で、赴任直前の洋行時、日本・米国との学会のチャンネルも確保しましたし、快適に仕事させていただいております。

JOCV・SVをこれから受験しようとしておられる方、また、今すでに、JOCV・SVに入っておられる方、もし、既に任期を終えた私が、参考になれることを言えるとしたら下記です。

トリガーとしては、赴任した直後に聞いた、2つの声でした。

あるJOCVは、「私は、2年間、自己研鑽も含めて、仕事以外はしたことがない。」

また、あるSVは、「以前とは違い、教職も離れてしまい、この南洋ののんびりした雰囲気。スキルを落としてしまった。」

と言うのです。私は、赴任して早い時期に、この2つを聞いてよかったと思います。

前者を教師に、後者の言葉を半面教師にさせていただければ、と思います。

前者は、私も、なかなか真似できていませんが、ミクロネシアも、1面的には、釣りやスキューバダイビング主体のレジャーランドであるのに、仕事に集中していて偉いですね。後者は、本当に残念な話で、何とか避けないといけません。

だから、SV含め、仕事中心に30か国ほど行った立場、そして、JOCV・SVの派遣事業を含めたODA（Official Development Assistance）が、国民の血税から励起されており、業務を実行する現場は、効率と実績を高めないといけない、現実から言うと、

- 1) 現場での仕事をきっちりと、ベストを尽くし、説明も丁寧に施し、相手方に対して、誠意を持ってやる。日本の信頼にも繋がるので。

2) 国外からでもいいので、絶えずスキルアップを目指して、任国の情報を完全把握すると同時に、You Tube 授業・Skype 等からでも、直近の世界情勢の情報を取っていく。同じ、専門で、絶えず、discussion 出来る、仕事の仲間を日本や他国にも持っておくことも大事。

3) JOCV・SV とともに、赴任先から職位をもらっている人もいます。

その責任の高さに、プレッシャーを感じてしてしまう人もいますが、むしろ、それを自発的に貰って、おのずと、仕事の中でのモラロジーにおいて、自分に縛りを入れていくと、いい仕事ができる。業務へのやり甲斐にもなります。

4) 昭和の時代で言う発展途上国とは、今の途上国は変わって来ているし、たえず動いているし、戦略も環境を見てフレキシブルに変えて来るので（大学のオープンキャンパスなどでも、学生自身が、海外 Amazon で、パーツを取り寄せ、試作機を作ってしまうような状況。何かしてあげると、コミットしておいて、その実行が3年後であっていいなどと言うことは通用しません）、高飛車な上から目線の態度・手抜きは絶対取らず、むしろ、胸を借りる感じで、相手方の身になって、できるだけ迅速に仕事をしていく。私自身、WHO の発展途上国水準が、月収 \$ 100 以下と書いてあったので、現地の人に「月給は、\$ 何十もらっているのですか？」（実際は、\$ 500 ~ \$ 1700 程度はもらっている）と尋ねて、響感を買ったことがあり、知見や行動で、時代を錯誤すると、国際関係にもヒビが入りかねないとも言えます。

5) 外国では、環境の違いもあって、仕事が、いきなり上手くは、行かない局面も多々あります。

その中で、節目・節目での、重要な結果を求められる局面がある筈なので、1st Priority のものが挫折しても、次に切り替えられる方法論を幾つか用意しておく。

こうしてバックアップを持って動いていると、憂鬱や焦燥には、なりにくいです。

この5点は、自らの健康と Security (治安・安全) をしっかり、確保した上でですが、非常に大切なことかと思えます。

昨今、フロリダ→ホノルル→ポンペイと歩き、また、日本にも、8か月に1度程度は、帰国していますが、各土地間で、そう見るもの・聞くものに違和感は、ありません。ネットの発達もあれば、そこに住む住民が、オプションな（日本側から見れば、“コンペティティブな”、になるのですか）、開発意識を持とうとすることで、昔で言う、先進国・中心国・発展途上国の枠組みは、住人のマインドも含め、崩れて来て、相互の環境やグローバルイズムが近づいているような気がします。

と、いうことは、日本人も、そのコミュニティに入って、そこで、道を切り開くことも含め、学ぶことも多いということです。

その中で、JOCV・SV 専門家に関しては、従来、非常に尊厳の高い仕事ですが、期間的には、短くて1年9か月。長い人で3年しか、任期はありません。

1人でも手抜きをしたり、「自分たちは無責任モードでいいんだ。」と煽ったりしたら、JOCV・SV 全体がそうだと対外的に取られ、特に若手の今後の行く道を阻まれることにも

なり兼ねません。

つまり、自分、そして、仲間のためには、自分、そして、仲間のために、自分たちの赴任期間の、JOCV・SVのイメージ・名声を、自分、そして、仲間のために高め、どの組織からも、貴重なキャリアパスとして受け入れられ、皆で、自然な形で次の仕事を呼び込むしかないことを意味します。

つまり、個々人が活動の中でやっていることとその心構えが、現職参加を除いた人たち全体の就職率を左右するのです。

(ここは、自分もやっている中で、前記2名の先輩の耳に残る言葉とも併せて、最初から意識しました)。

なお、特に、JOCV・SVにこだわらなくてもいいと思うのですが、日本人1人、周りが外国人ばかりの環境で、2～3年仕事をするというのも、自分自身が本当に客観的に試されことになるので、日本人全員に勧めたい位、いいことです。

かく偉そうに言っている、私自身も、実は、失敗や、“至らず”が、SV時代多く、同期と比しても、決して、優秀な人間では無かったです。

例えば、朝1の授業の進め方をどうしようか、階下に降りがてら考えていて、カバンを、クルマの中に入れず、トランクの後ろに積んだまま、発進してしまった時は、(幸い、加速が付き、それを、落とした後ろを走っていたのが、親切なタクシーの運転手で、私のIDを元に届けていただいた、中のコンピュータの破損も、資料がクッションになり、事なきを得ました)。

1週間ほどは、「このまま、教職を続けていいのだろうか」、と自己嫌悪に陥りました。

また、工学部の学生は、どちらかと言うと、ポーカーフェースであったようにも思う(後で分かったことですが、分かっているのに、分かっているふりをする子もいる)のですが、ある日突然、「教え方が下手だ。日本に帰れ！」と職場に言われたこともあります。

海外で、国際会議では、発表し慣れていると思っけていても、“伝わっている筈”との確信は、幻想であったのか、こうです。

その時は、横にいた別の professor が、「技術的知識は十分あるし、私自身は、彼の言っていることは全部わかるが、学生には、次元が高すぎるので、もう少し噛み砕いて説明すればいいだけのこと。」と助け船を出してくれて、難を逃れました。

この時も、血の気が引きましたが、以降、段取り的に、色々と、自分が自分の教え方に、注意しながら、突っ込みを入れるようになったのと、また、「教壇に立つ素質がない。」と言った人間と、教務で同職位くらいには、努力して、この先なかってやろうか、と、発奮ほどではないですが、その時既に思ったので、この時の経験は、今ありがたく、生きています。

新春、読者ひとり言

NTT・OB 大内 忠康

毎回貴会報を配信していただいていた数年になる。御礼を兼ねて、新年早々の62号を読んで思うがままに綴ってみました。

1. 『真藤 恒氏語録』

石井氏の「真藤恒氏語録」を毎回楽しみにして読ませていただいている。

当時、真藤総裁（社長）が誕生してから、全社的にさまざまな変化、見直し、改革がすすめられたが、それらが懐かしく思い出されるからだけではない。

そこにはこれまでの「語録」で、当時の真藤氏の経営者としての理念、物事の捉え方・考え方、信念等について、幅広い分野にわたって触れられかつ、かなり吟味されて整理されており、それに石井氏の解説と自身の率直な心情が添えられている。

また、「語録」、「石井氏のひとり言」の双方とも簡潔・明快で、かつ解り易い。

そこに読んでいて経営者としての真藤総裁（社長）の“凄さ”をあらためて認識させられるからである。

今でも真藤氏に尊敬の念を抱いているOBは少なくないと感じている。

一方、当時若手社員で今やグループ各社の中堅、幹部の方々には、この「語録シリーズ」によって真藤氏の当時語られた理念等が、あらためてよく伝わると思われる。勿論、現在はOBとなった方々にもである。

さらにはその後入社してきた若手社員の方々にも是非残して、噛みしめて読んで貰いたい内容と思われる。

民営移行から30年経った今までもこれからも継承していくべき普遍的なテーマ・理念が語られており、これからも原点に立ち返って参考にすべきことが多い。

そのためにも、これからも本シリーズを継続されて、いずれは集大成されることを期待している一人である。

2. 『海外グラフィティ』

田上氏のエッセイ「海外グラフィティ」は話題が豊富でおもしろい。

今回の「ドン・キホーテ」。ガキの頃に雑誌か何かで一風滑稽な漫画として見た記憶がある程度。この物語に、作者の辛い人生が背景にあり、伝えたかったメッセージが込められていたとは、今回初めて知った。

数年前に友人から田上氏著作の「豊かさの風景」を貰って読んだことがある。海外の芸術・文化、産業、社会、歴史背景をはじめ、その時代の我国との比較やその後の変遷など、幅広く展開され豊かな内容が盛り込まれていた。

国内外の文化にふれた感がして、興味深く読んだ。それ以来ファンである。

NTT出身で海外の文化・産業・社会・歴史を紹介して論じかつ、当時の時代の日本との比較を通じて、さらに踏み込んだ内容で独自の視点と考察を試みて いる著書はないのではないかと考えている。

3. 『電電及び NTT 民営化直後の海外技術協力活動の実績』

加藤氏の「電電～NTT 民営化直後までの海外技術協力活動の実績」を読ませていただいた。

3分野（海外研修生の受け入れ、技術専門家长期派遣、青年海外協力隊への支援）の協力活動は、民営化頃まで漸増傾向で推移し、総計でも多人数に上っている。ただ民営化を節目に減少し近年ではわずかな人数という。背景には民営化と通信の自由化に伴い NTT の位置づけが変わった（その後の JICA の制度変更もあり）ことがあるようだ。

しかしこれまで電電（NTT）が積み重ねてきた役割・実績の継続性と、各国相互間の交流の基盤インフラである通信事業分野の重要性からしても、少人数の現状のまま推移してしまうのはどうかと思われる。

それは長年電電（NTT）が技術協力で果たしてきたインパクトについて、4項目に集約しているとおりである。

つまり発展途上国向けに通信インフラ整備、設備メンテのノウハウ等で総合力を発揮できるのは NTT グループであり、これまで長年に亘り担ってきた役割・実績を活かし継続して、今後とも海外技術協力を力を注いでいく立場にあるのではないかと思う。

近年 ICT 分野のみならずあらゆる産業でグローバル化が 進んでいる。海外から多くの産業や文化の分野で日本の良さ・品質の高さが評価され、各国間との産業、観光などでの交流も今後更に増加していくと見込まれている。

一方では、国の厳しい財政状況に伴い、ODA 予算は削減・抑制傾向が続いている。また社会は高齢化が進み健康寿命も延びており、グループ各社には各部門の経験豊かな技術力を有する退職年齢層の人材がこれからも多く見込まれる。折角の技術力であり勿体なく、国際貢献の志ある方々に「シニア海外ボランティア」等にチャレンジし発揮していただく良い機会づくりにもなる。協力経験者が問い合わせ・相談し易い形をとった中で募集をかければ、やり甲斐・生き甲斐と相俟ってこれまでより集まるのではないかと思う。

海外での技術協力活動は、人材の育成、人の交流等から始まり、そこから信頼関係、友好親善が育まれると言われる。貿易立国にとって大切な基盤づくりである。

NTT グループとして、これまでの海外との技術協力の実績・ノウハウを活かし、JICA の傘下のもと可能な範囲でより積極的な継続・推進の意思（方針）を示して取り組んでいくことは世の中からも理解されるのでは、と僭越ながら思えてならない。

第 21 回海外情報談話会開催模様

事務局

標記談話会は去る 2 月 19 日（金）に、JTEC（五反田）において開催されました。講師は元通信土木コンサルタント社長 及川陽氏で、話題は「通信土木よもやま話」でした。当日は 34 名の参加で、会場は満員の盛況でした。その概要を講師ご自身から次のようにご寄稿いただきました。なお、下段に石井孝氏が自身の Face book に投稿した感想を紹介します。



今日は「これからの通信土木をどうするか」をテーマに話を進めたい。

東京・横浜の自然災害のリスク指標は世界一ダントツに高い（ニューヨーク 4 2 に対して 7 1 0）。江戸時代以降、東京（江戸）では震度 6 の地震が 6 回あり、1 8 5 5 年安政江戸地震（直下型）、1 9 2 3 年関東大震災（震源は遠方の巨大地震）を経験している。次の大都市直下地震の備えるというのが第 1 のテーマだ。

阪神淡路大震災（1 9 9 5 年）のあと、土木学会を中心に綿密な調査検討が行われ、それに基づいて通信土木施設についても 2 0 0 3 年までに耐震性のチェックが行われた。その結果とう道は耐震性に優れており、防災ルートとしてとう道の活用をはかるべきである管路においては地震時に液状化の発生が予想される地域などで被害が出る可能性はあるが、離脱防止継手の使用により軽減でき、その他の地域では震度 5 までは問題ない。

第 2 のテーマは施設の劣化に対する適切な維持管理を行う問題である。中央道笹子トンネル内で起きた天井板落下事故（2 0 1 2 年）以来、この問題についても土木学会で検討が進められ、アセットマネジメントを導入した維持管理が行われるようになった。点検業務の結果を反映し、

ライフサイクルコストを最小化するため、遷移確率（マルコフ過程）を導入した劣化推移の予測を行っている。この手法は ISO と同様、将来国際規格化される。とう道（約 600km）、管路（約 60 万 km）、マンホール（約 70 万個）、共同溝（約 380km）等の管理は将来ビッグデータとして、IT に取り込みデジタル化されるだろう。



第 3 は無電柱化の問題である。街が明るくなるだけでなく、防災上も役に立つ。馬籠宿、白川郷、京都上七軒、須坂蔵の街など、最近目に付くようになった。しかし無電柱化率はパリやロンドンでは 100%、ソウル 46%、ジャカルタ 35%に比べ、東京 7%と大きく遅れている。政府でも遅まきながら道路法を改正して、防災上必要な道路については、電柱の設置を禁止する動きがある。

（ 2 月 21 日 及川 陽）

【石井孝氏 Face book より】

昨日の内輪の会合は、「通信土木」に関する及川陽さんのお話であった。通信土木と言うと一見耳慣れないが、今流で言えば「電柱の地下化」が代表例になるのかも知れない。しかし、これは通信土木としては極めて小規模なもので、東京などに於いては、膨大な通信量を処理するために必要とされる通信用ケーブルを収容する巨大な地下トンネル網が構築されている事は、あまり世間に知られて居ない。通信の光化などによってケーブルが細くて済むようになり、トンネルに空きスペースが出来るようになって来た。このスペースの利活用を考えると、従来の電話局舎の地下化などをはじめ、広義のロボット技術を駆使した新型の物流網に展開出来る可能性も出て来た。何せ、土木技術と言えば市内電車(都電)をすっかり地下に埋め込み、地下鉄網に変えた文字通りのシビルエンジニアリングである。「通信土木屋」がNTTの新たな経営展開に寄与し、邁進する事を期待して止まない。

第22回海外情報談話会開催のお知らせ

主催 ICT海外ボランティア会
協賛 情報通信国際交流会

第22回海外情報談話会を以下により開催いたします。どうぞ参加下さい。

日時：平成28年4月中旬 予定 午後3時～5時

場所：JTEC(五反田) 予定

(日時・場所が確定次第 連絡いたします)

題目：「電電・NTTの海外技術協力活動」(参加の皆様の見聞交換会)

始めに、最近発行し多くの反響があった冊子「電電・NTTの海外技術協力活動」(ICT海外ボランティア会編集)の内容を紹介いたします。

その中で技術協力のインパクトは、次のように集約されています。

- ・わが国のODA政策に呼応し、大きな尽力
- ・電電・NTTの自主プロジェクトの基盤醸成
- ・海外人材育成とNTTの知名度向上へ寄与
- ・わが国電気通信産業の海外進出に貢献

これを勧奨し今後に向けて見聞交換を行います。

主な発表者：

参加の皆様の見聞交換の場ですが、次の方々に切っ掛けとなる発表・意見をいただきます。

JICA 青年協力隊事務局

(技術協力経験者の企業における活動例、民間連携ボランティア制度等)

NTT 現職 (NTT海外業務の現状等)

NTT OB (技術協力活動の体験等)

参加：入場無料 お気軽にどうぞ！(会員制ではありません)

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 info@ictov.jp までご一報下さい

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp), または

村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

・巻頭言は、NTT コミュニケーションズ 取締役相談役 有馬 彰様の「電電公社・NTT 民営化直後の海外技術協力の発行を祝して」を掲載させていただきました。大きく海外に羽ばたいている NTT の力強い歩みを述べられております。本冊子にはもう一人方奥野恒久様（NTT 取締役）からも巻頭言をいただきました。これを次号（第64号）に掲載させていただきます。本冊子編集に当っては大変ご支援をいただきました。

・大内忠康さんからの会報の読書感想を「読書便り」に掲載させていただきました。的確な感想とご指摘は、我々編集担当にとって大いなる刺激と励みになります。その中で「冊子」に関するご指摘がありますが、「冊子」について多くの反響がありました。それで次回の海外情報談話会でこれを取り上げることとしました。詳しくは「開催のお知らせ」をご覧ください。

・前回の海外情報談話会は講師に及川陽様をお迎えし、東京オリンピックを控え、災害にも強いインフラとして、これからの通信土木に関する含蓄に富んだ内容で、会議室は参加者で満杯でした。会費なし・予算なしの当会にとりまして、いつも会議室を無料で提供していただいている JTEC 様にいつも感謝いたしております。 (以上 加藤)

・石井さんの「真藤語録」 今回の話題はその道に経験不慣れな、部下スタッフを指導する場合の「基礎の基礎」を教える場合の具体的例で、理解し易い話題でした。これはひとつ、技術の道だけでなく、芸術の道などにも共通な事と思いました。

・新東京医科大学教授岡田一秀先生の「SV 体験記」は、今後 JOCV、SV を志す人たちに参考になる示唆に富んだ寄稿文と思います。私は2006年、近くのトンガでSV経験しましたが、近年のかつての途上国の IT の普及を自在に取り入れた環境など、その変化を紹介していました。国際業務に携わる人たちにも参考になると感じました。 (以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 広報部長 村上勝臣

報道部長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 山崎義行

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：info@ictov.jp)